

情 熱

「情熱」ある行動で建設産業の未来を我々の手で創造しよう

第52代部会長 野村 康幸

【はじめに】

高度経済成長期であった1966年。いわゆる「いざなぎ景気」と言われ、第二次世界大戦後初の建設国債が発行されたことや日本の総人口が初の1億人を突破したこと、所得水準が向上し消費の大幅な伸び率により景気が上昇し日本経済が大きく拡大していく中で、同年10月に建設産業の未来を見据えた志高き先人の情熱により日本青年会議所建設部会の設立が提唱されました。その設立趣意書の文中に「業界内部の問題は山積みされており、諸問題の解決にわれわれは日夜努力を重ねております」「建設関係の業に携わるJCメンバーはJC綱領を基盤として相互の連けいを取り、青年としての英知と勇気と情熱をもって日本の建設産業の正しい発展と日本文化の向上の一翼を担う」とあります。その想いを胸に刻みつつ翌年1967年の設立以来、脈々とその想いを受け継ぎつつ建設部会を深化させるべくご尽力頂きました先輩諸兄の情熱と行動力があったからこそ半世紀もの長きにわたり建設部会を継続してこられたものと確信をしています。今の時代を生きる者としてまた、建設部会に身を置く者として現在の日本経済及び建設業界内部の諸問題を的確に捉え、我々部会員相互の連携を取り合いながら英知と勇気と情熱を結集させ諸問題・諸課題に真正面から向き合い行動を起すことこそが日本の建設産業の正しい発展に繋がり、日本文化の向上の一翼を担うものだと思っております。この建設部会が次の50年に向けて歩みを進めた一昨年の50周年を契機に、新たな未来へ挑戦した昨年を受け、本年は情熱ある行動で建設産業の未来を我々の手で創造していこうではありませんか。

建設部会には無限の可能性があると信じています。その可能性を活かしていくのは自分自身であると同時に、自分を律することで自らを磨き純粋な正義感と揺るぎない信念を持ち行動で示していくことが大切です。つまりは青年としての矜持を持ち、建設部会だからこそ出来る運動・活動を失敗することを恐れず情熱をもって勇猛果敢に挑戦することこそが、楽しさと部会員同士の絆の深化に繋がると共に建設部会の新たな未来が創造されていくものだと思っております。

【全国部会員大会に向けて】

2011年3月11日金曜日14時46分18秒。突然襲い掛かった宮城県牡鹿半島東南東130km地点を震源とする「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」は現在でも余震が続き、7年が経過しても鮮明に記憶されているところでありまた、決して風化させてはならない事案であることは言うまでもありません。発災により津波が発生し、多数の尊い命を一気に奪い取ってしまったことは紛れもない事実として今なお語り継がれています。更に地震の揺れによる液状化現象や地盤沈下、ダムの決壊などにより広大な範囲で被害が発生しライフラインも寸断し「壊滅状態」となってしまいました。その後も日本列島各地において気象災害や人為的災害によって甚大な被害をもたらしている中で、各地において人手不足・重機不足が叫ばれつつも地域住民を中心に災害ボランティア等が結集し各地からの支援を受けながら少しずつ復興に向けて前進している姿はまさに日本の「底力」であり、その多くに建設関連産業が関わっています。災害は起きてしまった事実だけで終わらせるのではなく、自分自身の目で確認し多くを学ぶことで「創造力」を身に着け、見識を兼ね備えることが「魅力」に繋がっていくのだと確信しています。我々自身の魅力向上に向け、さらには建設部会の魅力向上に向け共に自身の目で“被災地の今”を確認しましょう。

【国外建設市場からみた国内建設産業の未来】

私が生まれた1970年代の日本はまさに高度経済成長期であり、建物・インフラ設備の急速に建設が進められる中、建設技術が向上され同時に人材開発も強化されていき瞬く間に日本の「建設技術力」が向上されていきました。建設投資額が84兆円とピークであった1992年、建設業就労者数も右肩上がりとなり1997年には約685万人とピーク数を記録しました。しかしながら、投資額と共に建設労働従事者の数が年々減少し、1992年以降、建設投資額が最も減少した2010年には500万人を割り込む就労者数となってしまいました。現在では、建設投資額が増加に転じているにも関わらず就労者が微減し続けていることで、「人材不足」を招き、併せて若年層の入職者不足・離職者の増加も相まって日本人の労働力が減少しているように感じます。一方で、世界に目を向けてみると、東南アジアを中心として日本の建設技術が特に必要とされると同時に、日本には建設現場の即戦力として外国人就労者の活用促進が図られており、互いが互いを必要としていると考えます。また、先進国の中には

独自の政策によって建設業を「自国の重要産業」と位置づけ建設市場が年々上昇しているところもあります。日本の建設業はこれまでも重要産業であったように、これからもそうでなければならぬと確信をしています。そのような国外建設市場を学ぶことで、国内建設産業の未来を我々建設部会員が責任を背負うと共に、今後も成長が見込まれる国外建設でのビジネスネットワークをしっかりと確立して参りましょう。

【会員交流で絆の深化】

「ビジネスを中心とした会員の交流を通して」とある建設部会綱領。私自身、ご縁を頂き青年会議所に入会した2005年に建設クラブにも入会させて頂きました。入会当初は、社業とJC活動との両立や地域活動への参画などの言い訳を自分に言い聞かせ、建設クラブへの活動はしていませんでした。しかしながら、建設クラブに入会していれば本業への効果があると解釈をしていたのです。当然、仕事が舞い込んでくるわけもなく、どんどん建設クラブが手薄になっていった中、再びご縁を頂き、副クラブ代表や日本青年会議所建設部会の50周年という記念すべき節目の年にクラブ代表という役職をお預かりし、部会の会議・事業に参加させて頂くことで自分を恥じることになったのです。合わせてクラブ活動・部会活動の意味を理解出来るようになったのです。部会にはビジネスを中心とした交流やネットワークの土台は出来ています。しかし、その土台を活かしていくのは自分自身の行動であり、その深化がビジネスに繋がっていくものだと考えています。また、我々は青年経済人として、子を持つ親としてたくさんの責任を背負っています。大切に守り抜かなければならない家族がいる一方で、私たち自身が家族に支えられていることを決して忘れてはいけません。仕事や会議、事業とあって家を空けることが多く続く中、不安ながらも家族はその間しっかりと家を守ってくれていることに我々は十分な感謝の念を抱く必要があると考えています。その不安を少しでも理解に変えていくべく1日という非常に限られた時間ではありますが、しっかりと交流を深め、会員同士及び家族との絆を深化させて参りましょう。

【部会員同士の絆の強靱化と企業の繁栄】

建設部会の魅力の一つとして、全国から建設関連多職種のメンバーが集結し情報交換や情報共有を通じてネットワークが出来ることがあるのではないかと考えます。しかし、当然のように初対面の会員がいるわけであり、名刺交換をし、一言二言会話をしただけでその方の職種やネットワークに繋がるだけの会話が出来ているのか懸念されるところがあります。私

は、部会に参加するからには多くの人との出会いを大切にしたいと思うと同時に、打ち解け合える関係の構築が必要ではないかと考えています。さらにはその関係が強靱な絆となり企業取引の関係になっていくと共に、研修内容が各企業にフィードバックできてこそ建設部会の魅力が一回りも二回りも大きくなると確信をしています。そのような魅力的な研修を通して部会員同士の絆を強靱化させると共に、各企業の繁栄にも繋げて参りましょう。

【経営者として】

私たち建設部会員の多くは経営者の集まりです。そして建設関連産業に従事しています。高度経済成長以降、急速な速さで進められた建物・インフラ整備には必ず発注者がおり、工期（納期）や諸条件があります。請負者はそれらを全て満たしつつ利益を確保するため、時には時間外や夜間になっても、時には休日時でも作業に従事していました。そして、労働者は「3K（きつい・きたない・きけん）と言われても満足のいく賃金であったことで離職率が低かったのではないのでしょうか。近年では、時間外や休日労働はあっても公共労務単価の低下による賃金の減少という事実や3Kのイメージだけが残るといった負のスパイラルに陥っているのではないかと考えます。近年では少しずつ改善されてきているとはいっても、我々経営者としては建設業の働き方を今一度見つめ直す時期にきています。総理大臣を議長とした働き方改革実現会議や、関係省庁連絡会議において発信された事項においては、今までの建設業界の慣行を破る考え方や取組が記されており、我々経営者も日本の将来・建設業の未来を見据え「新3K（給与・休日・希望）」実現に向け真剣に考え行動をとる時期にきています。時代は急速に変化をし続けていきますが、私たちはそれらに機敏に対応すると共に先見性を持って行動して参りましょう。

【会員拡大の必要性】

青年会議所業種別部会の中でも最も多い会員数を有する建設部会ではありますが、年々会員数及びブロック数が減少してきているのが実態です。要因として、まだまだ建設部会の運動・活動・魅力が発信しきれていないところにあるのではないかと考えます。現にサマーコンファレンスにおいて出店するブースにはたくさんのメンバーに来ていただいておりますがその多くが「どのような活動をしているのですか」などといった質問が多く見受けられます。また、クラブにおいても、新設や復会を考えている地域もあり、どのような段階を踏むのか教えてほしいといったいわゆる素朴

な質問が多いように感じます。言い方を変えると、「建設部会には興味を持っているがどんな活動しているか見てから決めよう」と思う方が多数いるということになるのだと考えます。我々部会員においても会員数の増加・規模の維持によって成果を挙げられることが多々あります。また、人が多くなるということはそれだけネットワークが広がることに繋がっていきます。建設部会に入会し存分に魅力を感じている我々だからこそできる会員拡大活動を入会候補者及び設立・復会予定クラブに分かりやすく且つ情熱をもって勇猛果敢に行って参りましょう。

【会員支援について】

日本青年会議所建設部会創立50周年記念式典・祝賀会が開催された一昨年。私はクラブ代表として参画させて頂くことが出来ました。参加登録者数が1000名を超す会場の熱気は今までに感じたことのないものがあり、我々の運動の可能性及び組織力を再認識致しました。また、現在でも1400名を超える部会メンバーが全国に広がり人材ネットワークの土台は十分に備わっていると考えています。しかし、疑問に思うところもありました。それは、クラブ代表時に頂いた名刺の事務局が部会長の会社になっていることです。つまり、事務局も1年に1回は変わるということになります。事務局の担いを少なくすることでそれも可能なのかもしれませんが、50年を経過したこの組織に固定の事務局を置くことで情報を一括管理・配信することで、よりよい環境下で部会活動が行えるのではないかと感じました。また、人材ネットワークの土台が備わっているとはいえ、実際に「誰が」「どのエリアで」「どのような業種で」「何をしているのか」などと言った職種別の手帳を事務局で一括管理することでよりスムーズにビジネスに繋がっていくのではないかと感じました。さらには、災害の多いこの日本において、建設部会員が活躍する場面が今後も大いに予想される中、常に最新の災害対策マニュアルや組織系統を作成することで迅速かつ正確な対応が出来るのではないかと感じました。建設部会という素晴らしい組織が未来永劫に渡り継続発展するためには会員同士の繋がりが必要不可欠であると確信しています。そのために新たなる方策にて一歩前へ歩みを進めて参りましょう。

【関係省庁との意見交換を通して】

建設部会員と一言で言っても業種は様々であり関係する省庁においても国土交通省に限るとは言えません。しかし、国家基盤の根幹を支える日本の政治・行政の中心でもある各省庁との意見交換や問題提起などを行え

ることはまさに建設部会ならではのことであり、青年経済人としてこのチャンスを活かさなければなりません。併せて、企業人として常に問題意識を持ち動向に関心を寄せておかなければならないと考えます。部会員が関係する省庁との意見交換を通し、会員の資質向上と会員企業の成長に繋げることこそが建設部会の醍醐味であると確信しています。また省庁関係者との繋がりを一過性のものにするのではなく、継続して関係を構築していくことが安心して生活できる真に豊かな社会づくりの貢献に繋がっていくのだと、私は信じています。

【結びに～共に活動し共に成長しよう～】

部会活動というのは、LOMの活動がありBOM・DOM・NOMの活動があってからのことであり、どうしても日程調整が合わず参加できないことがあると思います。

私の好きな格言の一つに以下のものがあります。

- 20代で汗を流さなければ、40代で涙を流す
- 30代で知恵を出さなければ、50代で部下がいなくなる
- 40代で人脈がなければ、60代で仕事なくなる
- 50代で人望がなければ、70代で孤独になる
- 60代で希望がなければ、80代で後悔する
- 70代で夢があれば、90代で歴史に残る

皆様と共に部会活動を通して共に汗を流し、知恵を出し合い、成長して参りたいと考えています。それには皆様方の積極的なご参加が必要不可欠です。是非とも1年間宜しくお願い致します。